

## 《書評》

# 『図説 付属屋と小屋の建築誌：もうひとつの民家の系譜』

大場修\*編、青柳憲昌\*\*・平尾和洋\*\*\*ほか著、鹿島出版会、2024 年

牛 島 朗†

## I. はじめに

本書は、日本各地の「付属屋」や「小屋」と称される建物を取り上げ、人と住空間との持続的な関わりの諸相を読み解くことで、「もうひとつの民家の系譜」としての付属屋や小屋の魅力を描き出した記録集である。

私たちが伝統的な民家と聞いて、まずイメージするのは「主屋（母屋、おもや）」であろう。ただし、伝統的な民家での営みは主屋のみで完結するわけではなく、「主屋」に付き添う建物である付属屋や小屋があることで住宅としての機能が全うされる。本書の編著者である大場修氏は、そうした付属屋と小屋の存在に「もうひとつの民家の世界」を見いだす。日本における民家（主屋）の多様な姿は、これまで多くの書籍や研究論文の中でも語られてきた。そして、「合掌造り」や「中門造り」に代表されるような多彩な屋根形状を有する農家群、通りに面して様々な表情を持つ町家群などを含め地域性に富んだ景観が生み出されてきたことは既知の事実となっている。それらは、失われつつも未だ一部は各地に残存し、国内外問わず多くの人々を惹きつける地域資源となっている。ただし、伝統や地域性の価値が評価されるのは、その大部分が主屋に限られてきた側面も有する。一方、本書の編著者である大場氏は、「伝統的な民家といえば、主屋しかイメージがわからない通念」（14 頁）からの脱却を私たちに促す。そして主屋の傍らに存在する付属屋や小屋に視線を転じる重要性を説き、時に「主屋以上に地域性を表出し、個性的な場合だってある」（5 頁）ことを指摘する。そして、本書を「地域に密着する固有で多彩な付属屋や小屋を「住空間遺産」として収集し、誌した記録集である」（7 頁）と位置付け、数多の図版や写真を通じ、これまで意識されてこなかった「住空間遺産」としての付属屋と小屋の価値を伝えようとしている。

## II. 本書の構成

先述したように本書は、地域に密着する固有で多彩な付属屋や小屋を「住空間遺産」として収集し、誌した記録集である。そこには、民家史学・建築意匠学・構法・材料、さらには土木学という

---

\* 立命館大学衣笠総合研究機構教授

\*\* 立命館大学理工学部准教授

\*\*\* 立命館大学理工学部教授

† 山口大学大学院創成科学研究科教授

ushijima@yamaguchi-u.ac.jp

分野横断的な研究チームによる数々の成果が独自の視点と評価軸で整理されている。ここで全ての論考について詳しく説明を加えることは紙幅の都合上困難である。そこでまず、本書の内容を簡単に紹介したい。本書は全8章で構成されており、各章の概略は以下の通りである。

## 第1章：付属屋・小屋の知られざる世界

本章では、まず付属屋と小屋の持つ価値や魅力について、文献資料や辞書の記述などを取り上げ概説する。また、書籍全体の内容を概観し、各章で読者に何を伝えようとしているのか、要点を抄出している。

## 第2章 「生業」<sup>なりわい</sup>が生み出す小屋の形

民家は敷地の内も外も農林商漁業に関わる労働の場であり、2章では付属屋と小屋の生産労働の担い手としての側面を明確化する。その際、各地の生業と結びついた付属屋や小屋の在り方を総括的に説明するとともに、具体的な事例の紹介を通じて、様々な生業を担う付属屋と小屋の多様な姿を描き出している。

## 第3章 風土に向き合い、自然と共生する営み

日本の国土は、多彩な気候風土と地勢を有する。3章では、そうした風土と住空間との関わりを、民家と付属屋や小屋にとどまらず、屋敷構えから集落構成まで横断的かつ包括的に検討する。そして、住空間の地域性と多様性、そこに潜む秩序性、さらには自然環境と共生する生活の知恵と営みを明らかにしている。

## 第4章 命を守る：生存のための小屋

日本の豊かな気候風土や地勢は、時に自然の脅威という形で人々の生命を脅かす。4章では、付属屋や小屋の防災施設としての側面に触れ、水害に備える屋敷構えや小屋の事例から、土木・建築・生活が三位一体となった水防文化遺産とも言える価値を提示する。さらには、信仰対象として古くから人々を惹きつけ神聖化された富士山を事例に、登拝者のために設けられた山小屋の在り方を通じて「お助け小屋」の意味を再考している。

## 第5章 石を積む営み：石と木のハイブリッドな世界

日本の民家建築では、一般的に木造軸組と呼ばれる構法が採用されている。5章では、そうした木造を中心とした主屋に対し、「石」を材料として使用した付属屋や小屋の事例を取り上げ、石積み建物が最も地域性豊かな建物類型であることを指摘している。

## 第6章 土と石でつくるハンドメイドの風景

6章では、「ハンドメイド」という語が用いられているように、専門職である大工棟梁が建てる民家の主屋とは異なる、「人と住空間との持続的な関わり」の諸相を、土や石により形づくられる小屋建築や石垣の事例を通じて明らかにしている。

## 第7章 土蔵：究極の職人技

「土蔵」は、民家の代表的な付属屋であり、一般建築同様に木造軸組構法を用いながら土壁を厚く塗り木部を隠蔽した伝統的な防災建築である。7章では、「防火建築」の枠を超え、高度化した建築技術の変遷を取り上げるとともに、左官技術の真髄や、各地で発展した土蔵の地域性を明らかにしている。

## 第8章 もうひとつの民家の系譜

本書の副題を冠した最終章である8章は、改めて各章で取り上げた各種事例の持つ意味を紐解きながら、「付属屋・小屋とは何か」という問いに対する編著者の考えを書き記している。

## Ⅲ. 本書の特徴

改めて本書の特徴的な点を3つ取り上げたい。

### 1. 分野横断的なチームによる「住空間遺産」の記録集

本書では、もうひとつの民家の系譜として「付属屋」や「小屋」を取り上げるにあたり、北は北海道、南は九州まで、日本各地の様々な事例が紹介されるとともに、個々の建物を形づくる材料レベルから営みの総体としての集落レベルまで幅広いスケールの話題が展開する。それを可能としたのは、民家史学・建築意匠学・構法・材料、さらには土木学という分野横断的な研究チーム（大場氏のほか18名に及ぶ共著者）による調査・研究成果の数々である。これは科学研究費補助金による研究プロジェクト「『住空間史学』構築のための分野横断的研究」の成果であるが、当初予定されていたものではなく、いわばコロナ禍の副産物であるという。行動制限が課される中、オンライン環境が整備されたことで設けられた連続的な研究会、それが当初の研究プロジェクトのメンバーの枠を超えた各地の研究者の交流・議論の場へと発展し、生み出されたのが本書であるとする。つまり、結果としてではあるが、大場氏が「付属屋・小屋集成」と名づけてもよいほど、と評する付属屋や小屋に関わる様々な研究成果が本書の中に凝縮されている。

### 2. 付属屋や小屋を捉える視点

繰り返しになるが、本書には日本各地の数多くの事例が取り上げられている。各事例は、「北から南」や、「大きなスケール（集落）から小さなスケール（材料）へ」といったような単純な並び方はしていない。各章で提示されているのは、「生業」や「風土」といった付属屋や小屋を捉える様々な視点やモノの見方である。そこには、「主屋にもまして多様性に富み、地域固有の集落や町並みの景観形成に不可欠で重要な役割を果たしてきた」（6頁）という付属屋や小屋の魅力を読者に伝えようとする編著者の意図が色濃く反映されている。本書は必ずしも最初から順番に読まなければならないというものではなく、どの章や節からでもすぐに読めるようになっている。ただし、各章や節の構成は、編著者の考える付属屋や小屋の価値と魅力の捉え方により方向づけられている。

### 3. 書面を彩る数多の図版

本書のタイトルには「図解」という言葉が付されている。そして、実際に数多のカラー図版が各ページを彩る。これらの図版は「図説書であることに重きを置く本書の生命線」と位置付けられて

おり、共著者らから持ち寄られた図版には、付属屋や小屋の特徴を示す建築図面は勿論、読者の理解を助けるための模式図、さらには図版の美しさ自体に目を奪われる極めて精緻な手描き図面なども含まれる。その上で、高額な専門書ではなく概説書の価格帯で刊行することが意識されている。そこには、研究者のみでなく幅広い読者が手に取りやすい書籍とすることで、民家研究に関わる新たな学術的な展開に加え、広く地域の文化資源として全国の付属屋や小屋が再評価されることを期待する編著者の思いが込められている。

#### Ⅳ. 本書の意義

本書の編著者である大場氏は、本書の出版に至る背景として、自身の経験に「遠い淵源」を見いだす。それは、若き日の民家調査の経験まで遡る。当時の学術的な民家研究において、主眼が置かれたのはあくまでも古い主屋の「復原調査」と「編年調査」であった。そのため、主屋の付属空間や周囲の付属屋は調べるべき対象として位置付けられていなかった。そうした主屋の建築当初の形式を探り、原型を突き詰める復原作業の持つ「取捨性」に、当時の編著者は無自覚的にも「少し物足りなさ」を感じていたとする。

ここで改めて、以下に本書の一節を取り上げたい。

伝統的な民家といえば、主屋しかイメージがわからない通念を脱ぎ捨て、民家は小屋・付属屋・屋敷・集落という「住空間」の全体性の中で成立し発展したことを、主屋から視線をシフトすることで浮き彫りにする。民家（主屋）は付属屋・小屋なしでは成立しえないし、民家は屋敷を構え集落を構成する要素である、という当たり前の事実本書は立ち返る。（14 頁）

つまり、本書の根底にあるのは、一般の人々のみでなく建築の専門家ですらも長い間見過ごしてきた「当たり前の事実」への眼差しであり、自然や風土、生業との密接な関わりの中で生み出された日本民家の本質をより鮮明に捉えようとする姿勢である。そして、必ずしも既存の価値軸（古いもの＝歴史的価値、立派なもの＝意匠的価値、優れたもの＝技術的価値）にはなじまない付属屋や小屋の文化的価値をどのようにすれば測れるのか。その問いに対し、「日本人の伝統的な住空間の中で小屋や付属屋が果たしてきた役割やつくられ方を再考することで、その問いに答える」とする（15 頁）。そして、「主屋から視線をシフト」する上で、ただ漠然と見るだけでは得られない付属屋や小屋の価値や魅力について、捉え方の手掛かりを提示する。その手掛かりは、「生業」（第2章）、「気候風土」（第3章）、「災害」（第4章）、「石材」（第5章）、「積む技術」（第6章）、「土蔵」（第7章）など多岐にわたる。その視点の多様性にこそ、日本民家の本質を見いだす。そして、「自然に向き合い、生かされてきた人々の生業や生活文化、知恵の所産としての住空間であり、その総体である」との事実を、本書の副題に添えられた「もう一つの民家の系譜」として描き出すことを試みている。

その上で、「本書は、付属屋・小屋の端緒とすべく多様な視点を提示した。未知なる付属屋や小屋に照準を合わせれば、新たな位相の民家研究が再起動するはずである」と結ぶ（291 頁）。つまり、本書は計 19 名に及ぶ執筆陣による研究成果の 1 つの集成であるとともに、その他多くの民家研究者に対する新たな道標であり出発点を指し示す。

かつて、「土着的（バナキュラー）」と称されるような地域性に富んだ建築を扱った書籍の中で、



B・ルドフスキーは、「これまでの建築史の正系から外れていた建築の未知の世界を紹介することによって、建築芸術についての私たちの狭い概念を打ち破ることを目指している」と述べた（ルドフスキー, 1984: 16 頁）。また、P・オリバーは、「文化が変容すれば、古い建造物は変化に順応するし、新たに築かれる建物はその形態に、変化に適合した修正が加えられる。その一方で、資源の枯渇が次なる資源を生み、新たな技術への要求に繋がってゆく。全ての住居は静的であるが、重要な変化の歴史をもっている。土着建築物の研究にありがちな、伝統の原型や初期形態のみを探し求め、時代に応じた変化の歴史や類型に目を向けないという姿勢は現実的ではない」と記す（オリバー, 2004: 16 頁）。

日本では近年、地域性豊かな文化的景観を資源として評価し、保全・活用しようとする取り組みが各地で見られるようになってきている。一方、何に価値を見だし、何を守るのかの議論は必ずしも十分ではない。そのため民家建築に関わる評価軸も、未だ無自覚的に既成の価値観の下にあるという一面を否定することは出来ない。そうした現状に対し、本書は日本における住空間と自然や風土、生業や社会との関わりを再評価する必要性を示し、狭い概念からの脱却、時代に応じて生じた変化の歴史への理解を促す。

本書は日本における付属屋や小屋の全てを網羅しているわけではない。そのため「付属屋・小屋辞典」のような使い方は想定されていない。また、本書が提示する捉え方に基づいて内容に一定の方向づけが行われている。また、日本の各地に存在する未知の付属屋や小屋に眼を向ければ、多くの新たな発見が生まれることは想像に難しくなく、本書が提示する捉え方とも異なる視点が現れるであろう。それはつまり、数多の民家研究者らがこれから取り組むべき「余地」を提示してくれているとも言える。そして、その余地とは、長い年月の中で日本において培われた人と住空間の持続的な関わり、すなわち「住文化」自体の持つ豊かさの証でもあると考える。

#### 参考文献

- オリバー, ポール (2004) 『世界の住文化図鑑』(藤井明監訳) 東洋書林.  
ルドフスキー, バーナード (1984) 『建築家なしの建築』(渡辺武信訳) 鹿島出版会.